

# 電子ジャーナルとSPARC

土屋 俊  
(千葉大学)

# SPARCの背景

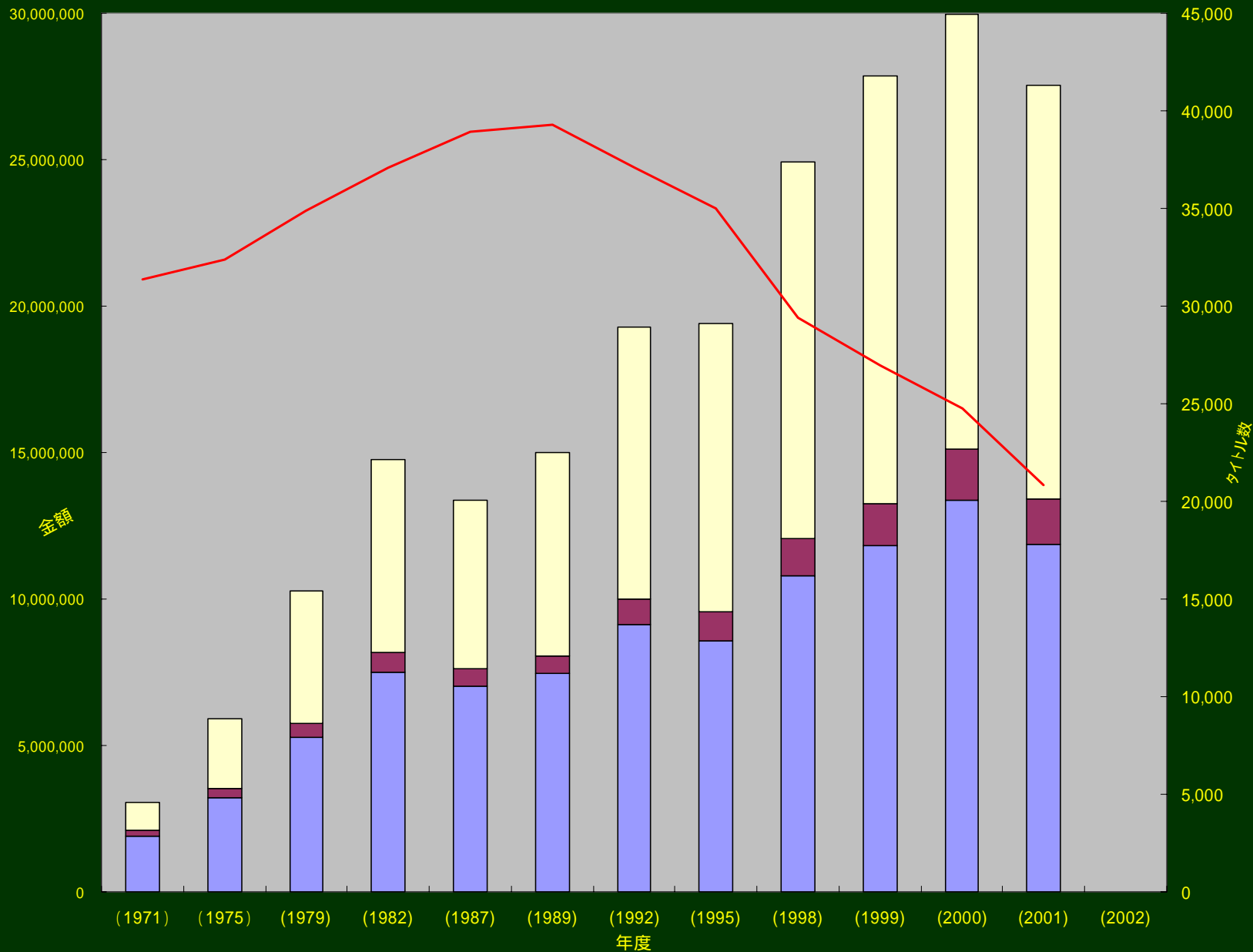
- “Serials Crisis”
  - 1980年代、90年代の雑誌価格高騰(不徹底な商業主義、科学者の増加による成果の増大等々)
  - 大学図書館の雑誌購読の危機(何を買うかではなく、何をやるか)
  - 自分の出した論文を自分の大学で読めない!
- 大学図書館の対応(80年代はレーガノミクス)
  - 図書館間協力(他館の依頼による複写提供)
  - 共同購入・共同保存
  - CDROM配布・ネットワーク利用
- それでも限界 SPARCへ
  - 商業出版社寡占による価格弾力性の回復
  - 科学者・研究者自身による流通コントロール

- 各大学におけるタイトル減の「予感」(タイトル減の真実は1999年に発覚)
- 欧米におけるSerials Crisisに関する知識の不足: 図書館側における出版流通体制への無関心(「代理店」依存体質のつけ)
- 比較的潤沢になった研究資金(科学技術基本計画、大学院重点化等)
- 「全体を見る」パターンリズムの減衰(NACISIS(1986年設立)の皮肉?)
- 図書館を襲い、かつ利した電子化の嵐(NACISIS-CAT、2次文献情報CD-ROMサーバ、リテラシー教育など)

単位:千円

# 日本国内図書館の外国雑誌購入費および受入れタイトル数

但し1982年度までは和雑誌も含む



- 1993年クリントン政権によるNII
- その展開としてのインターネット・インフラの整備
- 出版社による取り組み
  - Print出版の価格構造への反省
  - 「販売戦略」の登場 (Academic PressのIDEAL、ElsevierのScienceDirect等)
- 図書館コンソーシアムの登場
  - Big Deal(まとめて安く 利用促進)
  - 出版社への圧力
  - ICOLC(1998年発足)

- 大学・大学図書館

- Elsevierの積極攻勢 (SD21プログラムの提案、2000年からの円価格等)
- 円価格問題への対応 (国立大学、私立大学等で異なった)
- サイト・ライセンスがよくわからない、価格モデルがよくわからない (もっともまだ誰もわからない)

- 学会・出版社

- 電子化できる出版社の不在 (印刷会社の方が強い)
- 「ウェブ = ホームページなんて」
- 「なんといってもピア・レビュー、レフリード・ジャーナル。それをウェブで?!」

- 2002年からの契約を念頭において2000年9月設立
- 出版社との直接交渉を原則(当初は、主要5社ターゲット)
- 契約条件の改善(1大学1サイト原則、ILL、学外者利用、プライス・キャップ等)
- 利用環境の改善(ミラー・アーカイブ設置、利用者講習担当者研修、統計情報の正確化(COUNTER対応)等)
- 予約購読意思決定システムの改善、「集金」システムの確立の推進(「全学予算化」等)
- ただし、契約は大学ごと(条件は国立大学全体を一つのコンソーシアムとみなさせる)
- 相当程度の成果:「2002年は(日本の国立大学の)電子ジャーナル元年」
- 現在20数社と交渉

## 4. 限界とSPARC

- 2002年以降値上げがとまっているわけではない(「2桁値上げ」の会社もまだ多い)
- 全学予算化には伸び率を止める副作用(法人化を前にした萎縮との相乗逆効果)

### 手詰まり

- 2001年8月(9/11直前)、米国SPARCからの呼びかけ(SPARC Europe準備中、日本・アジアが今後の課題、独自のシステムの追及)
- 文部科学省情報科学技術委員会「根岸ワーキンググループ」における検討、報告書への反映

日本の学会誌の状況について(図書館として)初めて認識

- 一部学会による先駆的認識
  - 物理系学会 IPAP
  - 日本化学会
  - 「学会事務センター」(日本生化学会等)
- JSTによるJ-STAGEの登場
  - 電子化なしには学会誌存続はありえない
- これまでのコスト回収構造の問題と相関
  - 投稿料
  - 購読料
  - 会費
  - 補助金等

- 電子ジャーナル・インターネット提供に耐えるコスト回収モデルの確立
  - サイトライセンス
  - パッケージング
- 電子化によるコスト減メリットの真の意味での実現
  - 査読・編集プロセスのオンライン化
  - その他
- 出版モデルに代わる流通方式の創出
  - 学会と図書館の協力
  - 機関レポジトリ
  - アーカイブ

# 雑誌の電子化で何が変わる？

- 読者の行動

- 図書館へ行かない
- 利用の増大
- 多くを浅く？

- 図書館の役割

- 物品購入から利用契約へ
- 保存から利用案内へ
- 単独からコンソーシアムへ

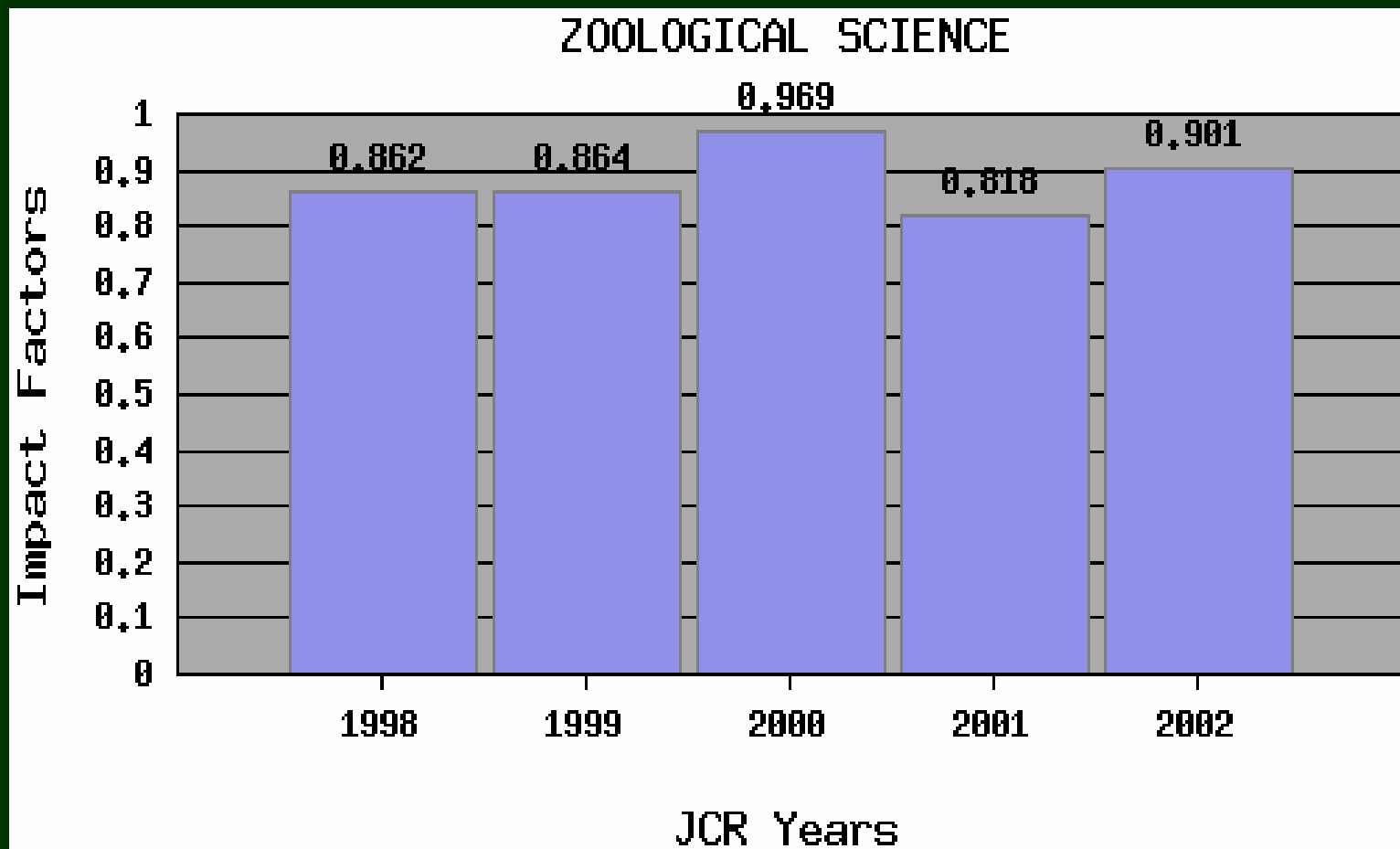
- 出版側

- 多様な表現手段・検索性の増大・「リンク」・「アラート」等
- 紙を出せばかえってコスト高
- プリント・キャンセルは宿命

- 雑誌がどのように利用されているかについての無知
  - 誰がいつ読むかは「アンケート調査」のみ
  - 恣意的サンプル調査
  - 唯一の指標は「引用」--「引用」を数える？
  - 結局、雑誌単位の評価
- サーバから提供する電子ジャーナルにはアクセス・ログがある
  - 実際に利用される様子を見ることが出来る
  - 論文ごとの「利用」状況を判断できる

- 海外における購読実態が強く、幅広い
  - アメリカはもちろんだが、ヨーロッパ、アジアも
- とくにMedline経由が顕著
  - 19巻分析による
- 「ただ読み」が結構多い
  - ライセンシングの必要性
  - 適正な値段とは？
- カテゴリによらず読まれる論文が多い
  - タイトルも「号」も結局「パッケージ」
- 利用者行動の調査にご協力を！

# Impact Factor 推移 (1997 ~ 2002)



- Impact Factor for year X =  
Year X cites to Years (X-2)&(X-1)  

---

Number of articles published in Years (X-2)&(X-1)
- 注意すべき点：
  - 「雑誌」単位での指標である
  - 前年・前前年への引用だけがカウントされる(5年間で集計、半減期計算等)
  - 分野ごとに違う
  - 自雑誌内相互引用
  - さまざまな「引用」(儀礼的?レビュー?実験方法?、、、)
  - ISIによる事前選別 (Cited-only journals)

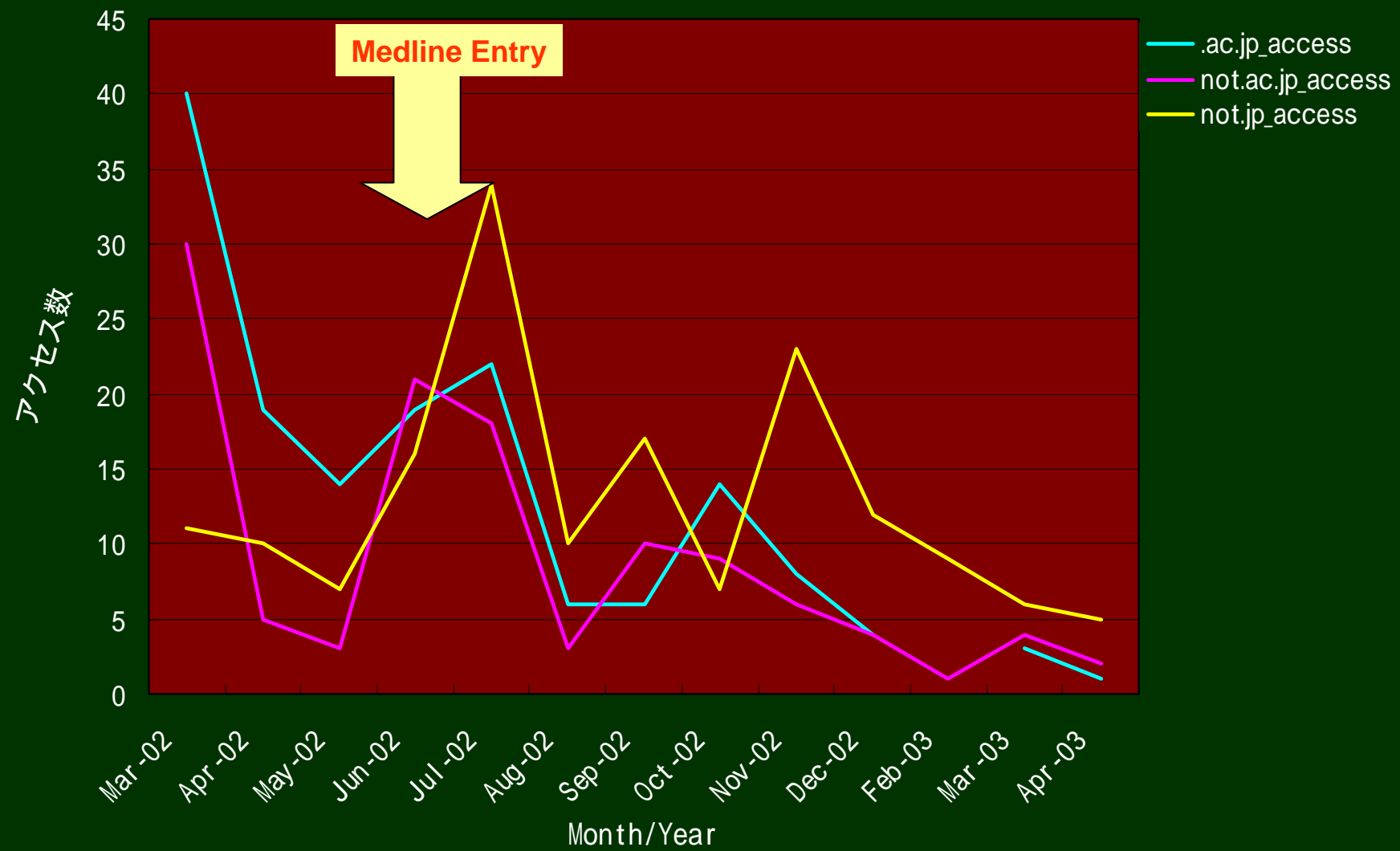
- 動物学会がJ-STAGEにデータを請求
- 論文・日付・IPアドレス (Class C)ごとにアクセス件数
- Caveats:
  - アクセスとはダウンロードである (PDFなので)と前提
  - ダウンロードした論文は読まれていると前提
  - IPアドレスから機関名の復元はある部分は経験と勘
- 2001年から2003年へのログデータ
- 19巻に集中して検討

# アクセスのランク

No	CODE	Total Accesses	Accesses from AC.JP	Accesses from non- AC JP	Accesses from NonJP
No. 1	No19_ 1	439	156	116	167
No. 1	No19_ 7	288	74	28	186
No. 5	No19_ 539	284	60	22	202
No. 7	No19_ 755	237	25	11	201
No. 3	No19_ 253	220	44	23	153
No. 8	No19_ 841	218	45	10	163
No. 1	No19_ 67	214	53	26	135
No. 1	No19_ 15	194	71	17	106
No. 3	No19_ 309	191	31	15	145

# 19巻1号アクセス数推移

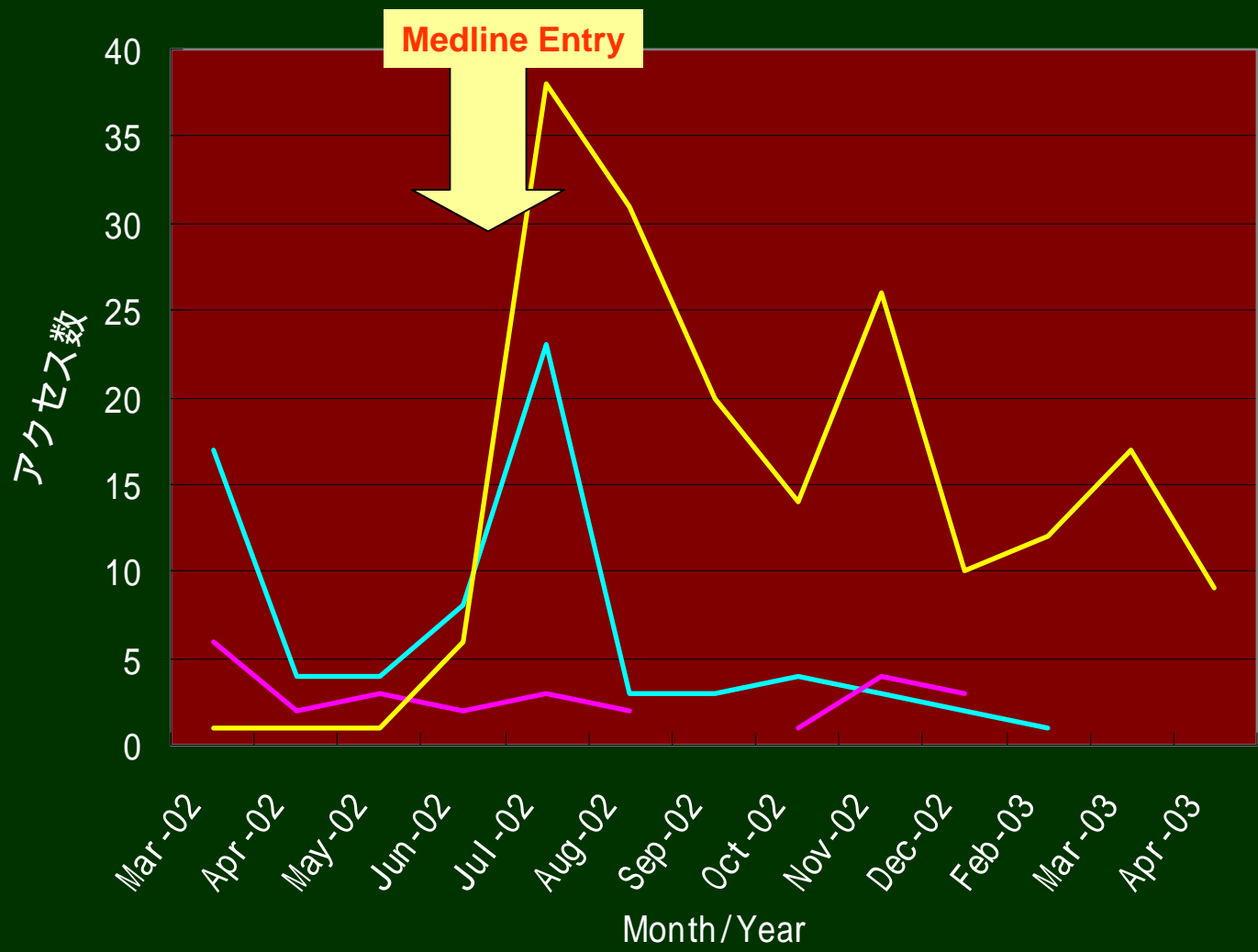
No.19\_1



# 19巻7号アクセス数推移

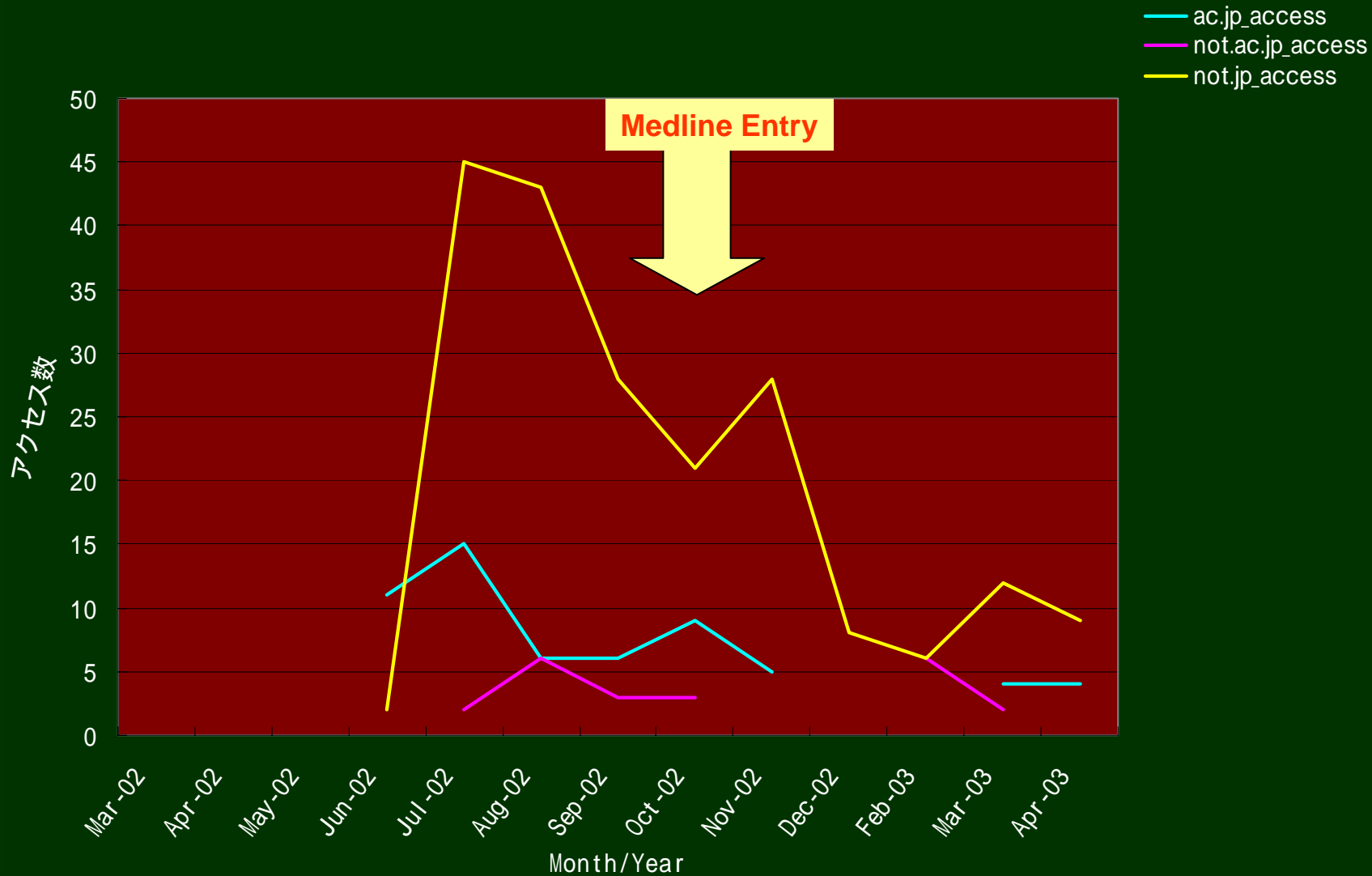
No. 19\_7

- ac.jp\_access
- not.ac.jp\_access
- not.jp\_access

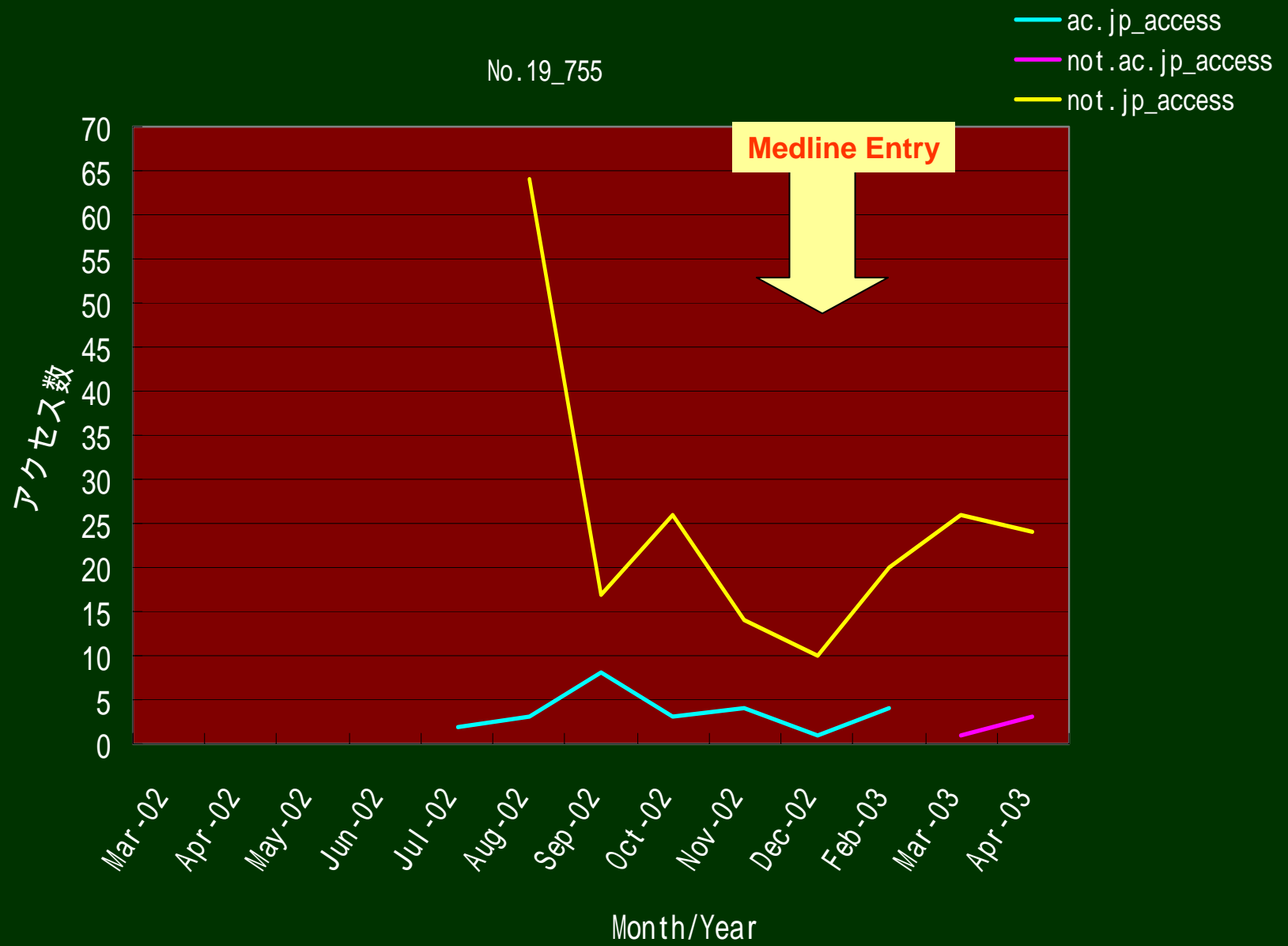


# 19巻539号アクセス数推移

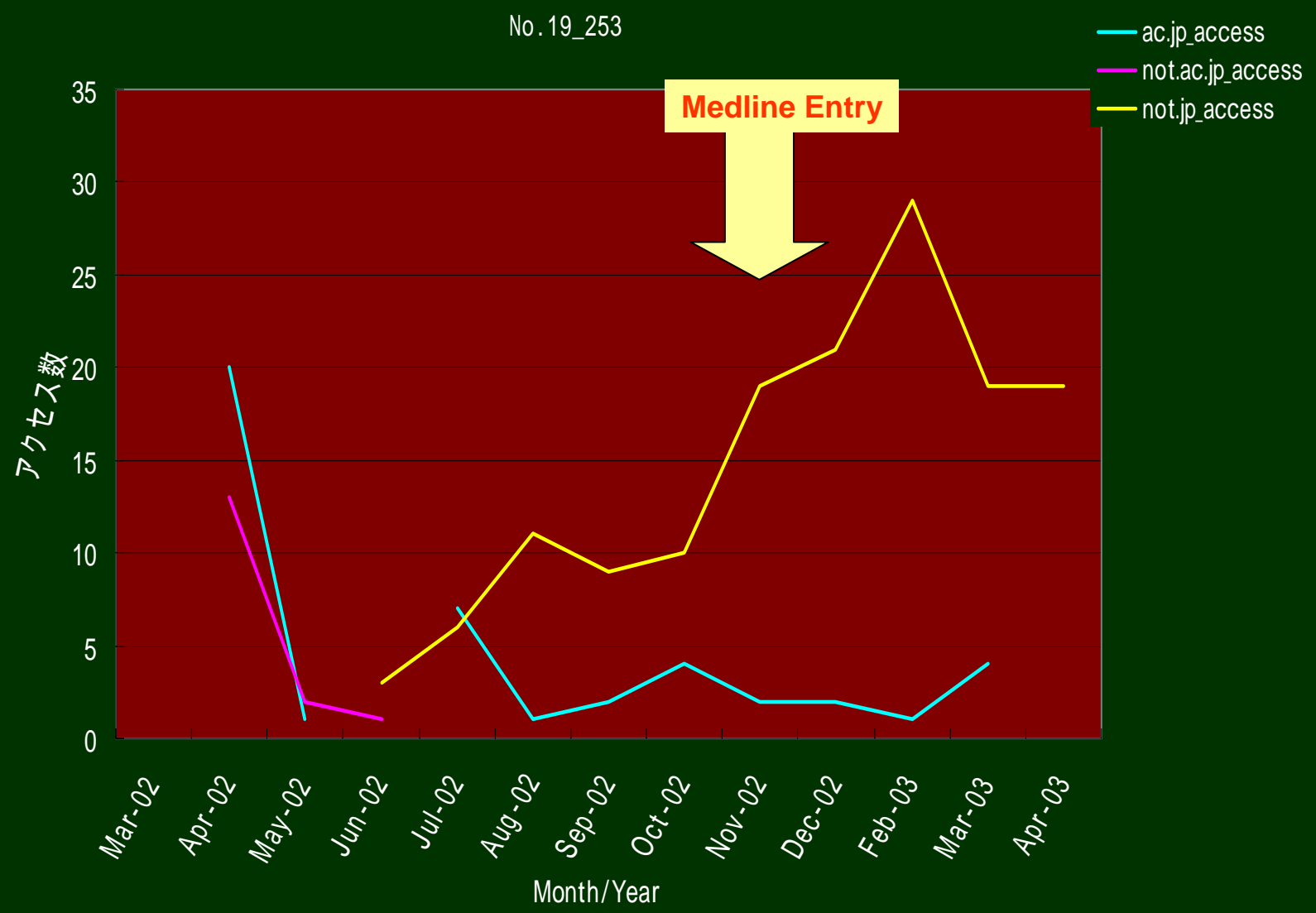
No.19\_539



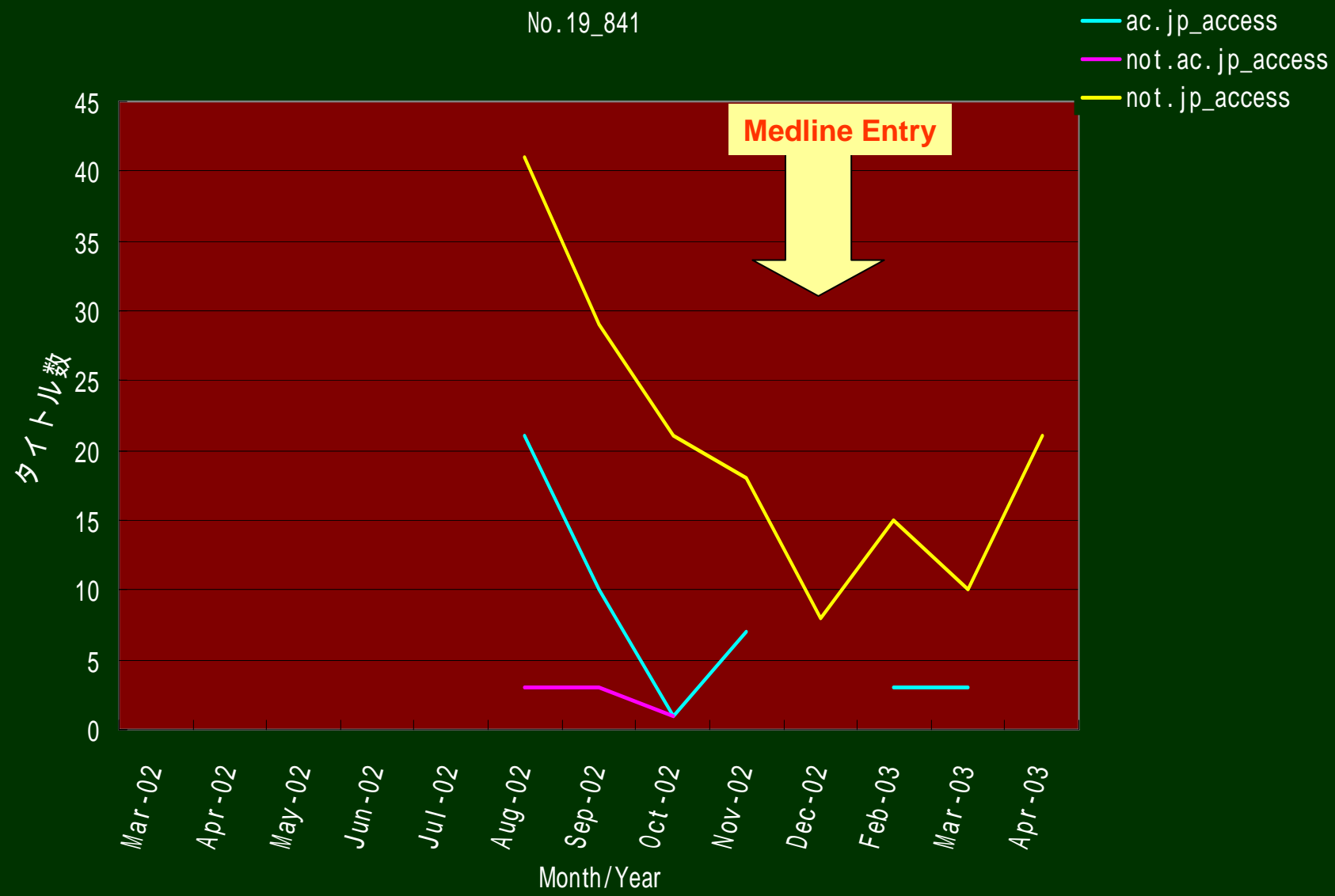
# 19巻755号アクセス数推移



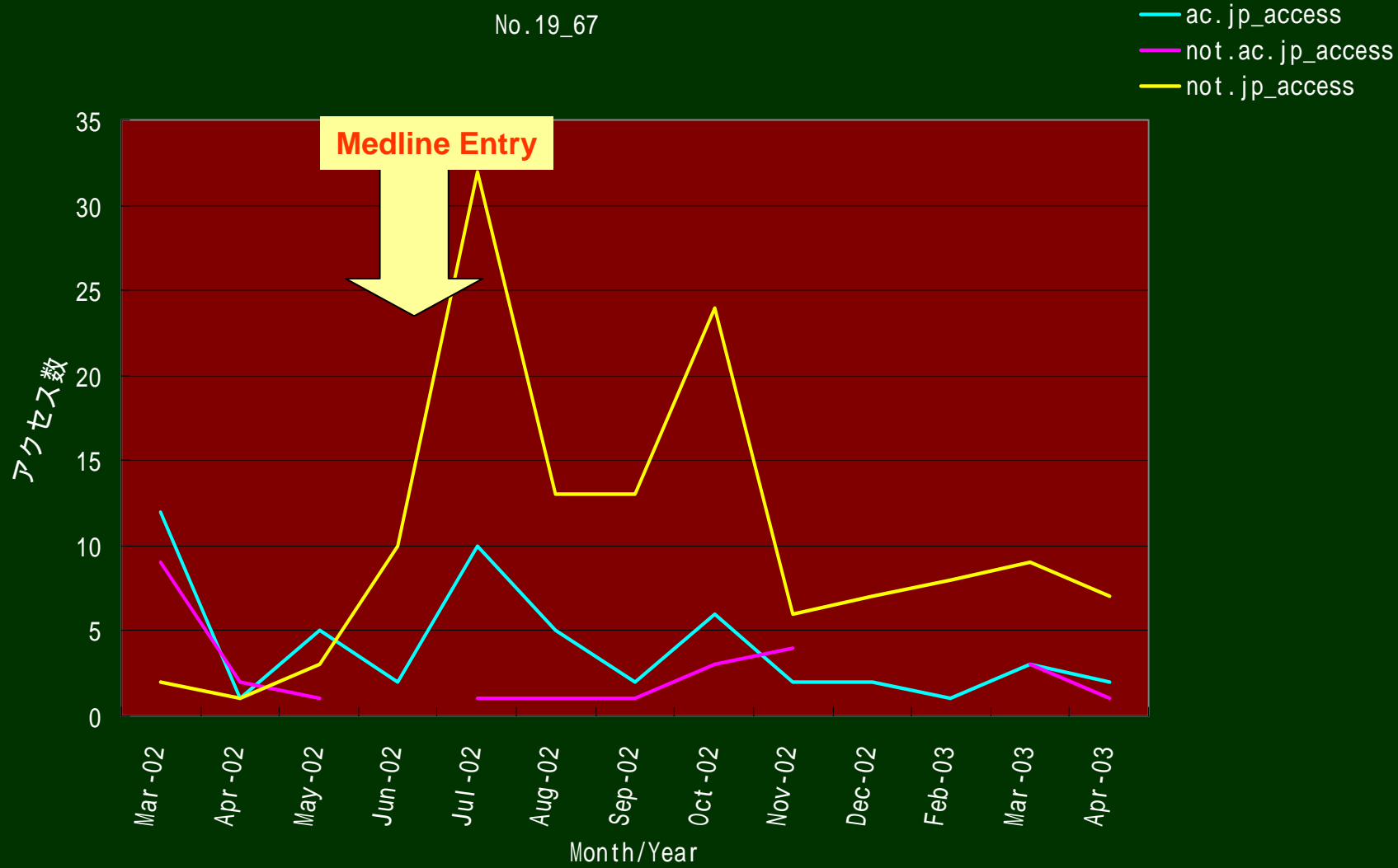
# 19巻253号アクセス数推移



# 19巻841号アクセス数推移

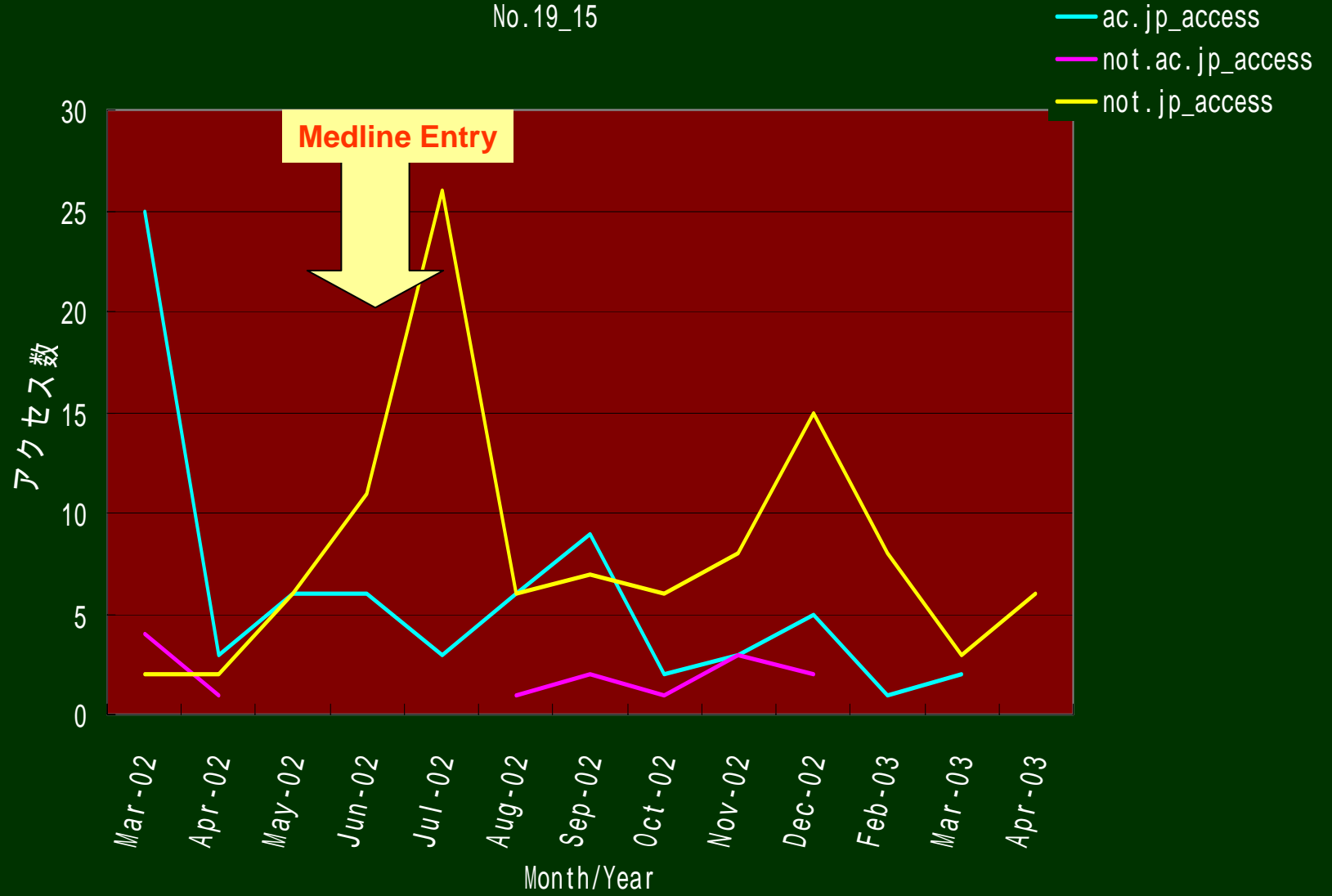


# 19巻67号アクセス数推移

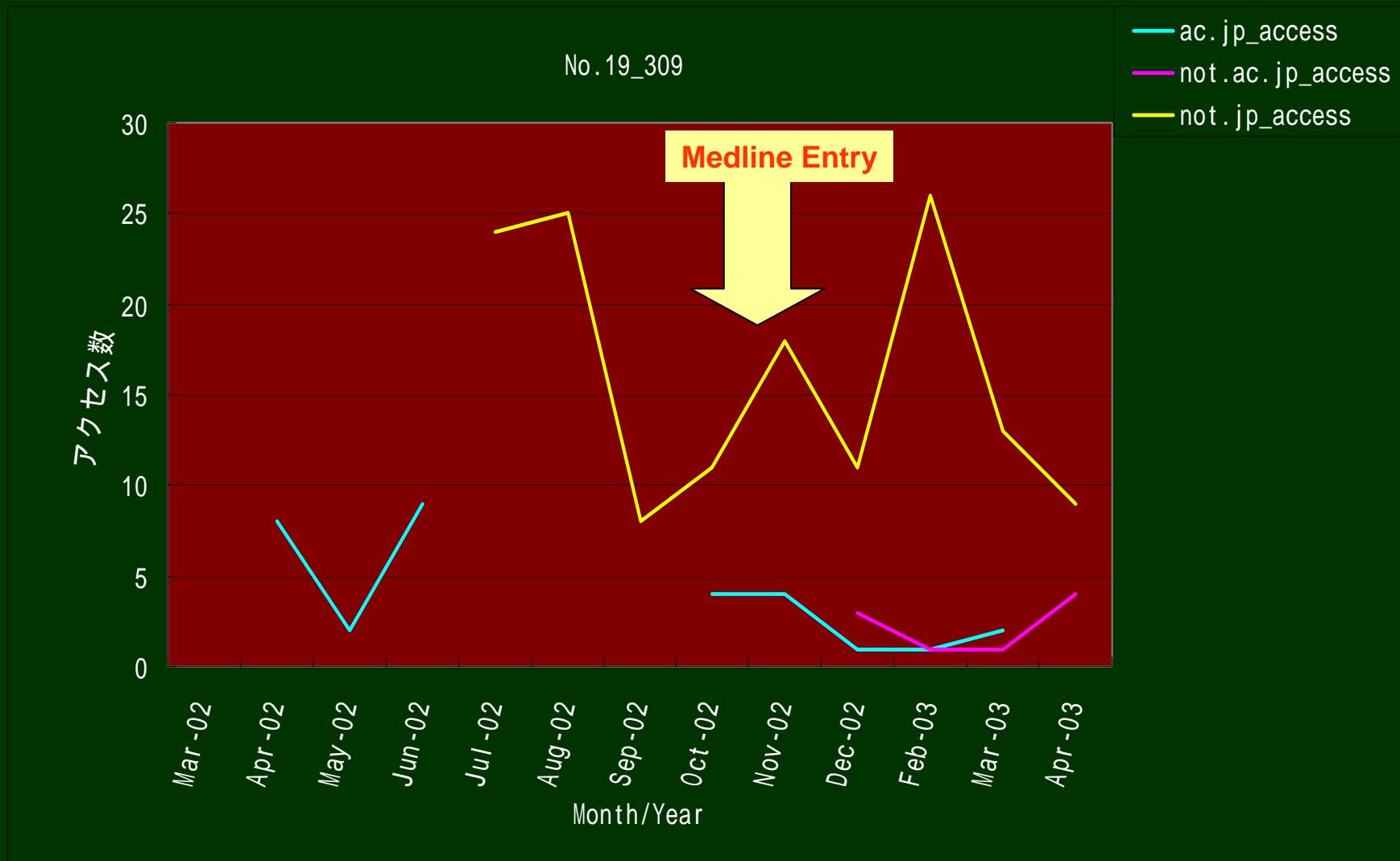


# 19巻15号アクセス数推移

No.19\_15

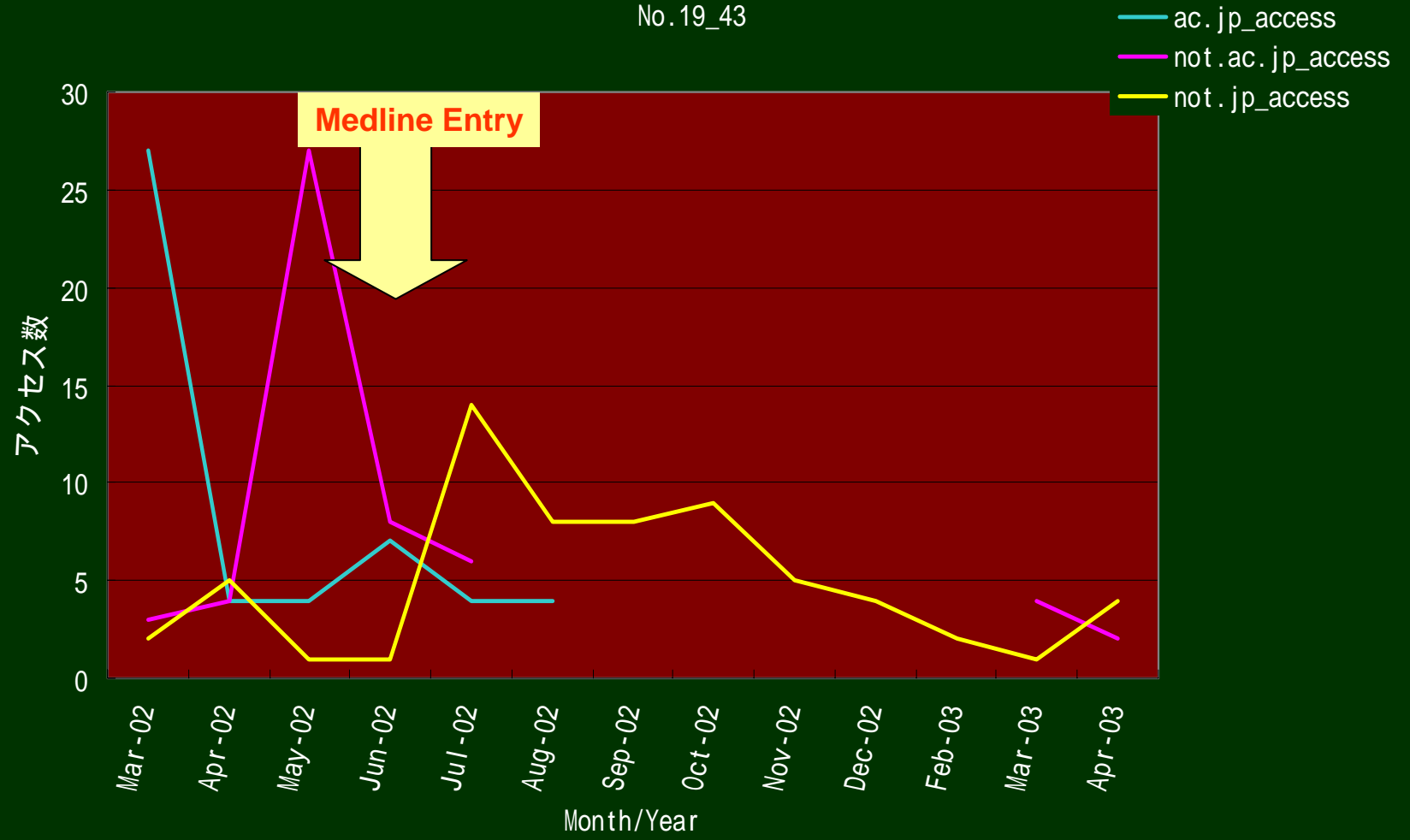


# 19巻309号アクセス数推移



# 19巻43号アクセス数推移

No.19\_43



# 日本版SPARCへの期待

日本版SPARCへの期待

# Impact Factor 推移 (1997 ~ 2001)

